

連載

社会教育行政職員のための施策立案の「虎の巻」

<第30回：最終回>

社会教育行政に携わるといふこと

井上 昌幸

この「虎の巻」もいよいよ最終回を迎えました。当初の予定では一年間の予定でしたが、30回まで続けさせていただきました。この2年半の間、皆様方から応援に支えられて続けることができました。改めて深く感謝申し上げます。

1 社会教育行政はどうなるのでしょうか (1) 20xx年の日本

地球上では、AI（人工知能）が発達し、人々のよりよい暮らしを支援している。この平和な暮らしは、平穩に訪れたわけではなく、Society5.0の中で、AIを悪用し平和を乱す勢力に、善良に推進しようとする勢力が勝利し、地球上は善良なAIが学習を重ね、悪のAIを絶えず駆逐し、平和な社会を支援している。

人々は、スマホよりも軽快なウェアラブル端末を所持し、イヤホン無しに骨伝導により、簡易に対話ができるようになっていく。AIは人々に物事の好機や危険を知らせるとともに、適宜適切な助言をしてくれる。

学びたいと思えば、画面と音声でその人

に応じた学習コンテンツを提供してくれる。それも常日頃から、絶えずその人のニーズを生活状況から把握しているからである。

教育はAIが究極の個人学習を実現し、個人の理解度に応じたコンテンツを提示してくれる。そのため、一斉授業が姿を消すとともに、AIとのやりとりの中で、学習成果が適切に評価され、何を覚えているかではなく、何ができるようになったか、何に関心を持っているのか、何をしたいのかが重要な学習評価の視点になっている。

学校教育も姿を変え、文部科学省は世の中の状況を踏まえて、各発達の段階で到達すべき知識や技術をガイドラインで示すことが大きな役割となった。学校はこれまでの学年やクラスという枠組みではなく、同じことを重点的に学びたい者同士が柔軟に集まっては解散していくクラス編成となり、月に何度か集まる程度になっている。

大学入試も形を変え、入学のための試験は、AIによる受験資格の確認と時間をかけた口頭試問が一年中いつでも受けられる。その結果によって、適切な大学・研究者を紹介してくれるとともに、入学許可が出される。

既に学歴は姿を消し、ここでも、何を学

んでいるか、何ができるのか、何をしたいのかが重要な評価基準になっていく。

企業の人社においても、働いて何に喜びを感じるのか、その会社の製品の製造や販売、もしくはサービスの提供にどれだけやりがいを感じるかがAIの口頭試問により判断され、採用の可否が決まっていく。

そのような状況において、AIに支配されていると感じる者は、ウェアラブル端末を地面にたたきつけるが、すぐに新しいものを買うことになる。端末を外した後に訪れる様々な不幸によって、AIは自分のためにしてくれていると実感するからだ。

そのような中、AIは時折おかしな指示を出す。皆が言い始めた。「隣の家に行つて話をしなさい」「散歩をして会った人に声をかけなさい」等々……。

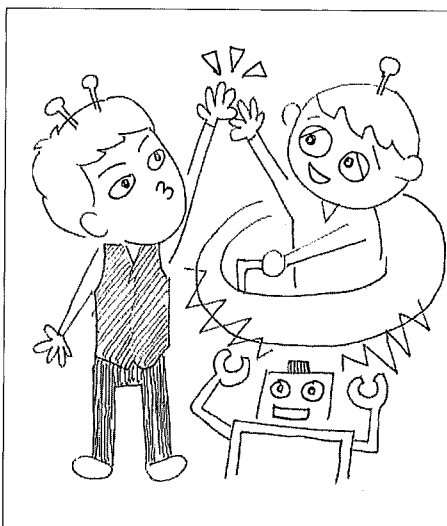
そしてついに、国家戦略を考える内閣府を支援するAIが、「公民館をつくりなさい」「青少年教育施設をつくりなさい」と矢継ぎ早に提案するようになった。内閣府の担当者も最初は相手にしていなかったが、繰り返されるAIの提案に、人々の本心に豊かな暮らしとは、人と人との交流によってのみ得られるのだと認識せざるを得なかった。

内閣府からの指示により社会教育に関する取組の推進が国策として推進されることとなった。

その頃、職業能力開発セクションと合併され、縮小されていた文部科学省が改めて注目され、豊かな暮らしの実現に向けた体制整備を行うことになった。

人々が本心の豊かな暮らしを実現する、ヒューマンコミュニケーション社会(SocietyX)の到来である。

※この話は筆者によるフィクションであり、内容、登場する人物や機関等については全て架空のものであります。



大変稚拙なショートショートで失礼しましたが、このような時代の中で、社会教育行政は何をすべきなのかを考えてみてください。

このよう時代であっても、社会教育活動は大変重要なものとなっていくと私は考えます。

文章の中で、学習情報提供、学習評価、学んだ成果を生かすこと、人と人とのつながりを作る等等については、これまで生涯学習・社会教育行政が取り組んできたことです。文中のように、学校教育は制度的なものであるため、その役割や形は大きく変わりますが、社会教育は人々の自主的な学びを旨としているため、その役割自体は大きく変わることはないと思っております。

つまり、どんな社会状況においても、いつの時代においても、社会教育活動は、求められていくものと思います。ただし、それらの社会教育活動が社会教育行政に期待されるかは別問題だということです。

それでは社会教育行政が、その期待される存在になるためには何が必要なのかを考えてみましょう。

(2) 期待される存在になるために

私が先のショートショートでお伝えしたかったことは、社会教育行政はいつの時代も「出番」であるということです。しかも、子供から高齢者まで、生涯を通じた学習活動を支援しているという点です。

しかしながら、首長部局への移管、他部局

との棲み分け、予算と人員の削減等、いつの時代も「ピンチ」の状況も同時に指摘されているのです。

社会教育行政には「ヒト・社会教育主事等、公民館利用者等」「モノ・公民館、図書館、博物館等」「コト・参加型学習の手法、学習プログラム等」の強みがあると述べさせていただきました。

これらの強みを生かして、人々の学びの充実や、地域でのつながりづくりをしていくことこそ、社会教育行政職員のミッションなのです。国、都道府県、市町村の社会教育行政職員が力を合わせて、取り組んでいきましょう。

そこで心に留めていただきたいことは、社会教育行政には指導要領的なものが存在しないため、何をしなければいけないというものはありません。

その不確かさが弱みと見える向きもありますが、必要と思うことは何でも実施することができるといふ強みとして捉えることもできるでしょう。

つまり、社会教育行政職員は、地域の未来を見通して、先駆的にそして機動的に取り組むことができるということなのです。これまでも、人権問題や環境問題、高齢化の問題等々、社会教育行政がどの部局よりも先に、先陣を切

ます。

皆さんも、是非、先輩から後輩に自分の想いと経験を伝えていただき、社会教育行政のさらなる推進を目指していただければと思います。

(2)「虎の巻」を支えた人々

本連載を行うに当たっては、当初から国立教育政策研究所社会教育実践研究センターの二宮伸司前社会教育調査官をはじめ、専門調査員の方々に校正をお願いし、誤字脱字や事実誤認等のチェックをしていただきました。最終回に当たり心から感謝申し上げます。

そして何より、お忙しい中にもかかわらず、私の拙稿を読んでいただいた読者の皆さんに感謝申し上げます。

また、皆様も気になっておられたかと思いますが、連載に登場する「謎の挿絵」は何なのか？ということですが、読者の皆さんからも、「虎の巻にいい雰囲気や挿絵を作ってくれたいますねー」というお言葉をいただき、文章を書いている私としては助けられたと思います。

そして、モデルはいるのか？誰が書いているのか？というお問い合わせを多々いただきましたので、最終号でご紹介させていただきます。

挿絵と同じポーズの写真です。右から、栃

つて取り組んできました。

このような、地域住民の課題であれば、どのような分野でも教育という視点からであれば、取り組むことができるという強みを生かしていつていただきたいと思います。

是非、ミッションを常に頭に置きながら、その実現を目指した取り組みを進めてください。「公民館は人と人をつなぐ施設ですよ」「地域を元気にする施設ですよ」と言われるような取り組みを目指していただければと思います。

また、社会教育行政は予算が少なくてもある程度の成果を挙げることが出来る部署です。なぜなら、地域住民とつながっているからです。成果を挙げたものは「良かった」で終わりにすることなく、「何がどうなった」という評価を続けていただければと思います。そうすることで、社会教育行政の存在意義が少しずつ地面にしみこみ、いずれ地下水となつて、社会教育行政の存在意義が明確になるでしょう。

それと併せて、社会教育計画の策定は必要不可欠です。自治体では、部門計画の策定は労力と予算の無駄と総括され、策定しづらい状況も見られます。今後、働き方改革が推進されれば、その流れは一層強くなるでしょう。

しかしながら、計画は社会教育行政が自治体の中で何に取り組んでいるのかを明確に示



木県教育委員会生涯学習課の山崎浩之社会教育主事と大山健男社会教育主事（H30年度まで）です。二人とも新人で教員から行政に入ってきました。最初は大山社会教育主事だけだったのですが、連載が延長され、さらに新人が必要となつたことから、山崎社会教育主事も後輩として登場しました。

二人の挿絵を描いたのは、同じ生涯学習課に勤務していた山田由紀係長です（左端）。行政職員のため今は農政部に異動しています。毎月「虎の巻」の原稿を読んで描き続けてくれました。

また、講演等で各地域にお伺いした際には、参加者の皆さんからいろいろな感想を直接伝えていただき大きな支えになりました。心か

していくものであるため、策定しなければ推進体制が弱体化すると捉えていいでしょう。各自自治体での計画策定を期待いたします。

2 社会教育行政職員を離れて

(1) お会いした皆さんへの感謝

最後の1ページは、私が社会教育行政に携わった18年間に会った、全国の都道府県や市町村の社会教育行政担当者の方々への感謝を述べさせていただきます。

全体的に、社会教育行政職員は、熱意がある人が多く、数年間の任期であるにもかかわらず、真摯に取り組む姿に敬服する日々でした。様々な勉強の機会を与えていただきありがとうございました。

私も、社会教育主事講習を教員の立場で受講したときに、学校を外から見ることができた開放感と、学びの内容を決めることができ

る自由さに感動したことを覚えています。県の社会教育主事として初めて予算要求を行い、財政課折衝に惨敗した時に、厳しく叱咤激励してアドバイスしてくれたのは先輩の社会教育主事でした。いつかはそのような社会教育主事になりたいと思いつつ、18年間携わってしまいました。その先輩のようにはなれませんでした。今回の「虎の巻」によって、少しは恩返しできたものと考えてい



ら感謝申し上げます。

私も、社会教育行政を離れ、学校に勤務しています。社会教育行政で学んだことは、大変貴重なものであったと感じています。

これからも、その経験を生かして、地域の教育力を生かした学校づくりに専念していきたいと思つています。皆さん2年半の長い間、大変お世話になりました。また機会があればお会いしましょう。

井上昌幸（いのうえ まさゆき 栃木県立足利工業高等学校定時制教頭・国立教育政策研究所フェロー）

連絡先：inoue-m02@nchiugi-edu.ed.jp

イラスト：山田由紀